



2016年(平成28年)
12月号(No. 859)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

平成28年度年次晩餐会を開催、1年間の多彩な活動を振り返る	1
新入会員は5年連続200人を超える	1
第4回登山教室指導者養成講習会を宮城県・秋保温泉で開催	5
平成28年度 第5回 登山教室指導者養成講習会	7
村井葵著『幻想のヒマラヤ』を読む	8
連載 日本山岳会とヒマラヤン・クラブのこと	9
追悼 徳久先生と私	10
東西南北	11
活動報告	12
緑爽会	
支部だより	12
静岡支部	
Climbing&Medicine	75
新入会員	15
図書紹介	15
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	18
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

平成28年度年次晩餐会を開催、1年間の多彩な活動を振り返る 新入会員は5年連続200人を超える

平成28年度年次晩餐会が12月3日、東京・新宿の京王プラザホテルで開かれた。皇太子殿下がお忙しいご公務のなかご出席されたのをはじめ、481人の会員が参加、マナスル初登頂60周年や「山の日」施行など話題の多かったこの1年間の振り返りを行った。参加者は晩餐会での挨拶や講演会、展示作品など素晴らしい内容に感動し、それぞれから「元氣」をもらった。

■会長挨拶 新会員カードを発行

会場が品川から新宿に移って3年目になる。48のテーブルが並び、これまでと同じように「富士山」を中央に、北の「利尻山」から南の「開聞岳」まで、それぞれに山名が表示された。席は混乱を避け、すべて指定された。特別ゲストとして、キルギス山岳会のウラジミール会長

が参加された。

小林政志会長は次のように挨拶した。「今年を振り返ると大きなイベントが二つあった。一つはマナスル初登頂60周年だ。小さな島国が快挙をなし、世の中に大きな影響を与えた。カトマンズと東京で記念事業が行なわれた。もう一つは「山の日」のスタートだ。8月



皇太子殿下も参加された恒例の鏡開き

に上高地で記念式典を行なった。皇太子殿下ご一家のご臨席を賜った。来年は栃木的那須で開催。会がもつと元氣になるよう、再生委員会を立ち上げた。YOUTH CLUBと支部活性化を中心に会の改革を進めてきたが、10月から

準会員制度も導入した。また、会員サービス向上のため新しく会員カードを作る。」

■物故会員51人に黙禱

物故会員に対して黙禱した。昨年の晩餐会以降に亡くなられた会員は51人。名誉会員の川上隆さんは防衛大学山岳部のコーチ・監督として指導にあたられ、海外で数々の登頂を成し遂げられた。谷口けいさんは、ピオレドール賞を女性として初めて受賞され、若手のホープとして大きな期待を集めていた。田部井淳子さんは女性として世界初のエベレスト登頂者。東日本大震災の後には、ご自身のふるさと福島県で被災した高校生を毎年、富士山に案内した。徳久球雄さんは日本山岳文化学会でご活躍され、『コンサイス日本山名事

典』の編集者としても知られた。

■新永年会員は34人

永年会員が紹介された。新しい永年会員は34人。会員番号6095〜6254と復活会員だ。1966(昭和41)年4月から翌年3月までに入会し、以降継続して50年間、会員として活躍された。

宗實二郎会員が新永年会員を代表し挨拶した。「日本山岳会に入会して、山小屋にはお米を持参しなければならぬこと、切符は前夜から並んで購入しなければならなかったことなども教えてもらった。関西では、山は六甲山に始まり六甲山に終わる」と言われている。今なお六甲山や富士山を歩いているなどと語った。

■新永年会員(は復活会員)

北島光子、宗實二郎、小林忠雄、安彦隆一、小嶋誠孝、渡辺一、杉山泰司、菅谷保夫、吉田寛治、中島博明、渡辺竜吉、杉田博、目黒実、斉藤晋、林雅浩、雁部貞夫、小島守夫、安田成男、加藤博一、山崎郁郎、鈴木宏、丸山弘二、中馬董人、梅野淑子、菊池武昭、豊島洋一、田中栄弘、早川禎治、加藤朝章、池谷有爾、荒木壮一、大西康郎、林巍、立花種則

■鈴木会員に秩父宮記念山岳賞

第18回秩父宮記念山岳賞は、学術分野から鈴木正崇会員の「日本の山岳信仰と修験道に関する宗教学的研究」に決まった。

鈴木会員は日本山岳修験学会会長の要職にあり、山岳宗教に関する研究分野の第一人者だ。

①各地の山に関する伝承や史料を掘り起こし、日本全体の山岳信仰を通観する視野を切り開いた。

②神仏混淆の在り方を再検討し、「日本の近代を問い直す」ことを試みた。

③山岳信仰を文化の「資源化」や「客体化」の観点から、現代の変化と連動した考察を継続して行っている。

表彰式が行なわれた。鈴木会員は「雲取山に三峰口から登ったところがある。途中、秩父宮殿下・妃殿下のリリーフがあったことを思い出す。昭和30年ころまでは白装束で山に登っていた。今は車を利用する。歩き方は変わったが、修験道は日本文化の根底にある」などと話した。

■会長特別表彰 宮城・福島などの山岳放射線量調査

会長特別表彰は、宮城支部の柴

崎徹会員に決まった。2011年

3月11日の東日本大震災後に起こった福島第1原子力発電所の事故によって、これまで親しんできたたくさんの山々が現在どの程度の放射線量を示し、その影響はどのような山々にまで及んでいるのか、被曝の実態を知るためには現地での調査が必要であると考えた。

2013年6月から宮城県、山岳放射線量の調査を開始。奥羽山脈、陸前丘陵、阿武隈山地、そして北上山地と調査を進めた。柴崎徹会員は、「宮城、阿武隈山地の調査報告が『山岳』に掲載された。うれしかった」などと語った。

■新入会員は233人、37人出席

続いて新入会員の紹介。今年はいくつと、5年連続で200人を超える新入会員を迎えることができた。晩餐会にはうち37人が出席し、ステージに上がった。代表挨拶に静岡支部の大島わかさんが進み出た。「日本山岳会に入ってから、本当に良かったと思っている。夢をかなえてくれている。富士山に登ったのははじめ、いろんな山に出かけた。黒部川・下ノ廊下は60歳までには行きたいというのが目標だったが、20歳で実現できる



小林会長から秩父宮記念山岳賞を授与される鈴木正崇会員

とは思っていなかった。南アルプス深南部の不動岳に行った。日本にこんな所があったのか、と感動した。ヤブこぎを強いられた。道なき道を歩いて自然を楽しんでいる。この9ヶ月は我が人生最良のときだった。先輩の山に対する情熱と技を引き継いでいきたい。」と大きな拍手を誘った。

■恒例の鏡開き

恒例の鏡開きは小林会長、皇太子殿下のほか宗實・新永年会員代表、鈴木・秩父宮記念山岳賞受賞者、柴崎・会長特別表彰受賞者の5人で行った。次いで八木原囃明・日本山岳協会会長の音頭で乾杯した。「いい年だった。撮影に参



本年の新人会員を代表して挨拶する大島わかかな会員

画した映画『神々の山嶺』が上映された。『山の日』が始まった。スポーツ・クライミングが、2020年東京五輪の競技種目に採用された。来年もよりよい年になるに違いない」と杯を挙げた。会食を挟んで全国33支部の会員の紹介があった。

■講演会・絵画展・図書交換会等

晩餐会に先立ち、4階では午後2時から海外登山の報告、また、秩父宮記念山岳賞の受賞記念講演会が開かれた。5階晩餐会会場の隣

では絵画展・図書交換会などが行なわれた。資料映像委員会はマナスル初登頂60周年を記念し、貴重な書簡などの資料を公開した。ネパール政府の登山許可証、2次隊長・堀田弥一の日記など。日記にはサマでの問題勃発が記されていた。図書交換会では300冊の山岳古書を陳列販売。スケッチクラブは33点の労作を展示した。

翌日の懇親山行は山行委員会が主催し、箱根外輪山の「乙女峠・丸岳・芦ノ湖展望台」への

ハイキングを行なった。

(文・高橋重之、写真・奥田有恒)

講演会

■日本山岳会創立110周年記念／ゴジュンバ氷河調査報告

大森弘一郎

地球環境が人の生活に好ましくない方向に進んでいるのは、我々が肌で感じ、多くのデータが示していることである。氷河の変化を通して、さらにその現実を人々に示す

こと、およびもしかしてその変化により現地に危険な氷河湖ができるのなら、それを推測する情報資料を得ること。これがこの調査行の目的であった。

ヒマラヤのチョーオユーから流れるゴジュンバ氷河は、衛星写真で現状をよく見ることができ。しかし、氷河池の細部や深さ、貯水された水の体積は知ることができない。これらを知り、取得したデータと画像を公開して今後の研究に役立てたいと考えた。

メンバーは大森弘一郎、野本勇(サポート隊)、岡内完治(F隊)。シエルパはリンジン・シエルパ、ガネット・ライほか5名。計画では、モンズーン明けの10月12日に日本を出発。まず3日間、空撮をして、その後現地調査のために高度順化に時間をかけて現地に行き、11月1日まで8日間、調査をするというものだった。空撮はぎりぎり最終日に好天をつかむことができ、ゴジュンバ以外の地域の氷河も撮ることができた。本隊は予定どおりルクラを出発、6日間、氷河の中をさまよった。

氷河池にゴムボートを漕ぎ出して、音波測深機で水深を10cm単位

で計測したり、氷河湖の落ち口の断面寸法と水の流速を測定した。

現在の水量を見ると、この水の排出の確保が常に必要なことが理解できる。現在は流出口がしっかりとできているが、この西側にあるサイド・モレーンが何かのことで崩れて排出口がふさがると水位が上がり、不安定な氷河湖ができる可能性がある。

報告はプロジェクターによる映像を交え、氷河の様子を伝えながら進めた。最後に「氷河は地球の大切なセンサーです。GLOF(氷河湖決壊洪水)は人の力で予防できます」というメッセージを大写真にして締めくくった。

■日本山岳会関西支部東ネパール登山隊2016報告

重廣恒夫

日本山岳会創立110周年と同時に関西支部は設立80周年を迎えた。関西支部では記念事業の一つとして、東ネパール北東部へ登山隊を派遣した。

目指す山は、世界第3位の高峰カンチェンジュンガ(8586m)を盟主とする山群にあるナンガマリII峰(6209m)とナンガマリI峰(6547m)。I峰はスイス



ナンガマリⅡ峰の登山報告をする重廣隊長ら

隊によって14年に登られているが、Ⅱ峰は未踏のままだった。

登山隊は、これまで日本山岳会が行なってきた高峰登山の伝承を目的としており、「ヒマラヤ登山塾」と名付けて、高峰登山経験者とヒマラヤ登山が初めてという若手会員が登山・生活とともにし、登山技術やノウハウを次世代に伝える試みであった。

登山隊メンバーは、重廣隊長の下に関西・四国支部の会員・会友9人が集まった。9人の年齢は26歳から69歳まで。いずれもヒマラヤの経験はほとんどない。

期間は、2016年ポスト・モンスーンの9月9日～11月8日。

モンスーン明けが年々遅くなっていること、予定より低い場所にベースキャンプ・C1・C2を設けざるを得なかったこと、高度障害などで2名の隊員をカトマンズまで降ろしたことから、期日ぎりぎりの登頂となった。

10月17日は零時に起床し、2時過ぎにC2を出発した。すでに目標をⅡ峰登頂に絞っていた。コル(5990m)までは予定どおりの時間内に到着。その後、西面ゆえの夜明け前の冷え込みもあつてスプリードが落ちたが、的確なルート・ファインディング、適切なロープやスノーバーの補充などで12時37分(日本時間15時52分)、Ⅱ峰の頂に到達することができた。

会報次号で詳細な報告を掲載する予定である。

■第18回秩父宮記念山岳賞受賞記念講演「日本の山岳信仰と修験道」

鈴木正宗

日本列島で生活する人々の精神文化を育んできたのは変化に富む山であり、思想や哲学、祭りや芸能、演劇や音楽、美術や工芸などの多彩な展開に大きな役割を果たしてきた。その中核にあったのが山を崇拝対象とする山岳信仰で、

山に対して畏敬の念を抱き、神聖視して崇拝し、儀礼を執行した。

日本の山の信仰の特徴は仏教との融合である。仏教には山林寂靜の地の山を修行の地とする考え方があり、僧侶が山で修行することが多く、山に寺を建立した。

日本各地に開山伝説が伝わる。開山とは僧や行者が前人未踏の山に登拝して祭祀や祈禱を行なうことをいう。近年は開山以来の区切の年を迎える山が多い。2016年は勝道の日光山開山1250年、17年は泰澄の白山開山1300年、18年は金蓮の伯耆大山開山1300年と続く。

山の信仰と仏教の融合には、山で霊力を獲得する修行を行なうて里に下つて加持祈禱をして民衆の日々の悩みに対処してきた修験道の影響が大きかった。「修験」という言葉の文献上の初出は、平安時代に遡るが、役行者を開祖と仰いで修行形態を整えたのは鎌倉時代中期以降で、本山派(天台系、聖護院中心)と当山派(真言系、醍醐三寶院中心)に二分化されて、教団化するのは室町時代から江戸時代である。江戸時代中期以降は、庶民の経済的な向上を背景として、山岳登

拝の講が都市や農村で多数設立された。富士講、大山講、御嶽講などで、精進潔斎の後に、それぞれの山に民衆が登拝した。

1868(慶應4年)に新政府は神仏判然令を通過し、これ以後、神仏分離・廃仏毀釈が進み、山岳信仰や修験道の拠点は大きな打撃を受けた。仏教寺院や仏像が大量に破壊され、神社と寺院は強引に分離された。1872(明治5)年に政府は、「修験宗廃止令」によって神仏混淆の修験道を解体した。

現代の大きな変動は、山岳信仰や修験道に関わる霊山や祭祀・芸能が文化財や文化遺産とされる動きが顕著なことである。2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界文化遺産に登録され、その中に高野山・吉野山・大峯山・熊野山が含まれた。13年には「富士山——信仰の対象と芸術の源泉」が登録された。そうした流れの中で、16年8月11日に山の日が国民の祝日に設定されたことは、長い歴史を持つ日本の山岳信仰や修験道を見直す契機になるであろう。

(講演会の報告は、それぞれいたいたレジメなどを基に構成した。文・高橋重之)

REPORT

第4回登山教室指導者養成講習会を
宮城県・秋保温泉で開催

支部事業委員会 武藤篤生

各支部での登山教室運営におけるリーダー育成のために、地方支部で出前講習会を開催する構想の初回として、宮城支部の全面的な協力の下、東北ブロックに参加を呼び掛け、平成28年10月15日(土)・16日(日)の2日間、仙台の奥座敷として知られる秋保温泉・岩沼屋ホテルおよびホテル近辺の里山で講習会を実施した。参加者は宮城支部15名のほか青森支部1名、秋田支部3名、岩手支部2名、山形支部1名、福島支部1名、その他首都圏など3名の26名で、期待どおり東北ブロック各支部からの参加を得ての講習会となった。

初日はホテルに集合後、ホテル内の会議室で座学講習を行なった。内容は野口いづみ講師の「山の医療と対策」、宮崎紘一講師の「地図読み・道迷い対策」、そして松原尚之ガイドによる「登山の安全管理」の3講座が行なわれた。野口講師の話は、山で発病することの多い心臓や脳に関する病気にも言及。

特にハチ刺されについては関心が高かった。携帯する薬品や器具に関する説明は実用的で、参加者は興味を持って聞いていた。宮崎講師の講義では、インターネットから入手できる地図やソフトウェアに関する関心が高かった。参加者の多くが初めて聞く内容で、新鮮だったようである。とりわけインターネットを使ったデモは効果的だった。松原ガイドは、登山教室の運営について、山行の立案から始まって装備、実施、非常時の対応に至るまで広範囲にわたって実例を交えながら説明した。緊急時に役立つ装備品に関する説明は実用的で、参加者は大いに興味を持っていた。

夕食後のホテルの宴会場での懇親会は席間の距離が離れており、やや話にくいところはあったが、懇親会の後の客室での二次会では、腹を割って親密な話ができた。高校などで指導経験のある会員の話や、各支部で若年層を取り入れる

ことの難しさなどの話も話題に上った。

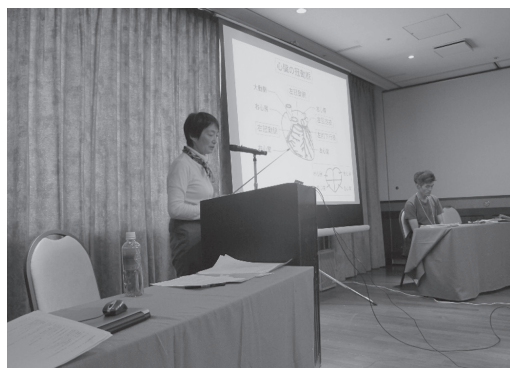
翌日はホテルから移動して、石切り場のある里山の広場で、松原ガイドによる「登山の安全管理と危急時対策」と題して実技講習が行なわれた。内容は、ツェルトの使い方、危急時のロープワーク、懸垂下降の実習、背負い搬送の方法、ザック担架を学んだ。

講師が非常時に最も役に立つ道具として挙げたツェルトを、実際に張りながら説明した。参加者の持ってきたツェルトを使って、参加者自身も設営する。実際にツェルトを張ったことのない受講者も多かったので、有意義であった。ロ



座学による講習会で熱心に聴講する参加者たち

ープワークは、基本的なロープの縛り方を講習したのちに最近の用具を紹介して、使い方の講習を受ける。新しい用具は初めて見る受講生が多く、使い方の容易さや効果に感心していた。簡易ハーネスの作り方の講習は、参加者全員が持参したカラビナとスリングを使って作った。要救護者を引き上げるときに使用するロープワークの講習では、カラビナや滑車付きのカラビナを使い、重量物の引き上げ方法を学んだ。簡易ハーネスとATCを利用して10mほどの懸垂下降を参加者全員が体験した。カラビナ、スリング、ストック、雨具を利用した背負い搬送の方法も



登山医療についてレクチャーする野口講師

受講。実際に背負ってみて背負いやすさを実感する。ザックを使って担架を作り、実際に搬送を試みた。

支部ブロックごとに今回のような講習会を行なうことについては、非常に歓迎された。ブロック単位で懇親会を行なったことはあるが、今回のような目的を持ってイ



ツェルトの張り方の実技講習を受ける

のだと感謝している。特に高橋二義会員には、準備から当日の進行まで、すべてにわたりご尽力いただいた。篤く御礼申し上げたい。

実技講習終了後、参加者一同で車座になって昼食のお弁当をいただいた後に反省会が行なわれ、和やかなうちに今回の講習会を終了した。

ベントを行なうことがなかったのも、一つの目的を掲げて活動することによって、連帯感を持つことができた。講習会を行なう際に、地方では講師の確保が難しいようであった。特にプロのガイドによる最新の道具や技術の紹介については有用であった。

今回の講習会を成功裏に終了できたのは、宮城支部の皆さんの協力のたまもの

大変有意義だった講習会

今回は参加を迷っていたのですが、先輩からのお誘いもあり参加しましたが、講習会は大変有意義で勉強になりました。目的の「日本山岳会の活性化・次期リーダー育成・登山のすばらしさや安全な登山を実践できる資質を具えた会員の増強・支部活動の一層の発展に資すること」を意識して講義を拝聴しました。

講習会の内容は初日は座学、翌日は実技講習でした。

最初は野口いづみ講師による「山の医療と救急対策」について。日本登山医学会理事の先生だけに



カラビナとスリングを使って簡易ハーネスを作る

「登山で注意する病気」「登山で起こりやすい体の不良とトラブル」「ケガ発生時の素早い処置を勉強しました。特にハチ刺されのお話は、すばやく逃げる対応やハチの感じる色のお話など、また現場の映像をリアルに見ることができて、大変参考になりました。医学の専門的な話ながらも分かりやすく、日常生活にも活かせる内容で、「山の病気とケガ」は即実践したいことばかりです。

次は宮崎絃一講師より「地図読み・道迷い対策」について。

「安全な山登りのための地図読み」と「道迷い対策の事前準備」は具体的かつ実践必須の内容で、特



ザックを利用して負傷者を搬送する実習

平成28年度 第5回 登山教室指導者養成講習会

募 集 要 項

日本山岳会支部事業委員会

- 目 的** 支部で運営される登山教室リーダー育成のための支援事業として、冬山・春山において必要な知識と技術を学ぶ指導者養成講習会を、昨年に引き続き「安藤百福センター」で開催いたします。登山のすばらしさを語り、安全登山を実践できるスキルを具えた会員を増強することにより、支部活動をより一層活性化させましょう。全国各支部から奮ってご参加下さい。
- 主 催** 公益社団法人日本山岳会 支部事業委員会
- 時 間** 平成29年3月4日(土)・5日(日)
- 場 所** 安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
長野県小諸市大久保1100 JR小諸駅よりタクシー 10分
- 内 容** 【座学講習】 4日(土)
◆冬山・春山における遭難例と事故防止策(仮題)
講師：宮崎茂男氏(長野県警察山岳遭難救助隊長)
◆冬から春の山岳気象予報の活用法(仮題)
講師：猪熊隆之氏(気象予報士、ヤマテン社長)
◆積雪期登山における安全管理(仮題)
講師：黒沢 徹氏(山岳ガイド・ステージⅠ)
※夕食後、講師を囲んでの懇親会を予定しています。
【実技講習】 5日(日)
◆箆ノ登山登山と実技講習(スノーシュー体験など)
講師：黒沢 徹氏(山岳ガイド・ステージⅠ)
- 日 程** 3月4日(土) 13:00集合 開講式ののち講義ほか
3月5日(日) 貸切バスを利用して車坂峠へ。箆ノ登山登山とともに実技講習。16:00百福センター帰着、16:30解散予定
- 参加資格** 日本山岳会会員で、積雪期登山のリーダーを目指す者。山岳保険に加入している者。
- 参加費用** 13,000円(概算)宿泊費・食事2食・現地交通費・資料代を含む
*参加者の人数により現地交通費(貸切バス代)が変わる可能性があります。なお、参加費は受付時に集金いたします(お釣銭のないようお願いします)。
- 募集人数** 20名
- 締 切 日** 平成28年2月10日(金) 定員になり次第締め切ります。
- 申込み方法** 別紙申込書に記載し、メールにて下記あてにお送りください。
- 申 込 み** 問合せ先 支部事業委員会 武藤篤生まで
eメール dr.mutoh@gmail.com
- そ の 他** スノーシューのレンタルがありますので、ご希望者はお申込み下さい。
5日の箆ノ登山登山の昼食(行動食)は各自でご用意ください。

に地図読みは「習うより慣れろ」が基本だと痛感しました。事前に地図から地形を想定する勉強が大切で、現地ではコンパスを使い、地図を正置して地形照合をすることなどが地図読みの基本で、最良の装備は「気力と体力の鍛錬」であることも学び、「安全で楽しい山登

り」に活かしていきたいと思えます。宮崎講師とはプライベートなお話もさせていただきましたが、私が「宮崎先生、今年は30回近く登山に出掛けました」と言うと、宮崎先生から「山登り同様に、家庭も大切にして下さいね」とご指導をいただきました。安全で楽しい山登

りは、自分だけで実行できるものではないということを気付かされました。
そして松原尚之講師による「登山の安全管理」について。
「危急時の対処方法」道迷い、ビバーク、ファーストエイド・キットなどについて学びました。プロの

登山ガイドの先生だけあり、実践的な内容でした。「インターネットによる情報収集」「地図の準備、天候や風速の事前調査」「国土地理院地図の上手な収集活用」など、準備を入念に行なう大切さが参考になりました。

松原講師は、登山ガイドを職業にしているだけに、お客様の安全を最優先に考えておられる方だと、感心しました。翌日の実技講習も精力的にご指導いただき、特に登山用具の活用方法・重要性についての講話や、参加者全員への実践指導「危急時のロープワーク」では、私の知らなかったオートブロッキング・ムンターという新たな技術を学ぶことができました。ザック3個を活用した搬送手法も新しいもので、大変参考になりました。

最後に、改めて登山に対して「心・技・体」の大切さ、そして道具と技術の事前準備の重要性を学ぶことができた、大変有意義な講習会でした。開催にあたってご尽力いただいた講師の先生方、関係者各位、参加会員の皆様には御礼を申し上げます。

(宮城支部 永浜洋光)

YOUTH CLUB「山の読書会」

村井葵著『幻想のヒマラヤ』を読む

10月からYOUTH CLUBのメンバーを中心にした「山の読書会」が始まった。我が国で愛されてきた山の名著を通じて先の岳人に学び、私たち自身の登山を考える。古典的名著もすでに版元品切れになって久しいものがあり、YOUTH世代には知られていない場合もある。古い本も含めて、もっと山の本に親しんでもらいたいと始まったものだ。

開催するのは毎月第3木曜日の夜。幹事役が指定する山の名著1冊を課題図書として読んでくることが条件だ。当日、皆でその感想や疑問に思ったことなどを話し合う。初回は『日本百名山』（深田久弥著）で、それぞれが登った百名山のこと、深田久弥にとつての登山がどのようなものだったと考えるかなどについて楽しく議論した。

次の11月回は『幻想のヒマラヤ』（村井葵著）であった。ゲストとして、本書に描かれた当事者であり、執筆にも関わった本会の成川隆顕氏がお越しくださったので、その様子をご紹介させていただきたい。

説明するまでもないが、本書は1965年、早稲田大学山岳部を中心とした若者たちが、ヒマラヤのローツェ・シャル（8383m）に挑戦した記録である。7000m付近で滑落した成川氏を救助した後、倒れて一時意識障害となった村井氏が、帰国後に記憶の糸を手繰り寄せながら、ローツェ登山で自身とパーティに何が起こったのかをもう一度筆でたどったものだ。

読書会の冒頭から、参加者の読後感想が続く。

「まず、登山口にたどり着くまでの遠さに驚きました。ヒマラヤのスケールの大きさ！」「山城に入るまでの楽しい旅の様子や、山々の景色が目に見えようでした」

本書は登山口に至るまでのアプローチの様子も丁寧に描かれており、若者が夢の頂に向かつて活き活きと歩を進める様子が目に浮かぶ。成川氏からは、50年以上前の海外登山がいかに困難だったか、出発に漕ぎ着けるまでのウラ話なども伺うことができた。

ある参加者から「命を懸けた人

間関係が心に残りました」と感想があった。おそらくほかの参加者にとつても最も印象的だったのは、このパーティの人間関係がいかに濃いものだったか、である。

村井氏による命懸けの救出劇、そして倒れた村井氏や凍傷を負った成川氏への隊員たちによるサポート、登頂への執念と疲労困憊のアタック隊が決めた撤退――『幻想のヒマラヤ』に描かれた物語が、のちの私たちに教えてくれることは大きい。山に懸ける食欲な熱意、生死をともしするパーティの友情と厳しさ、高所登山の難しさ、安全登山への示唆など。

「僕は村井や（同隊の）松浦輝夫さ



http://jac.or.jp/youthclub/post.html
終了間際まで成川さんに質問が続いた

ん、故人も含めて仲間たちに感謝しています。滑落したことはすまんと。思う。でも、逆の立場だったら、僕は同じように仲間を助けたでしょう」。成川氏がローツェのパーティに、どれほど感謝と尊敬の気持ちを持って過ごしてこれたか。全員が静かに耳を傾けた。

今回の読書会で、村井氏がこの本を書き残してくれたことを、改めてありがたく思った。この本を読めば、ローツェ登山に懸けたパーティの情熱や教訓が何度も甦り、多くの人に展開する。

読書会をきっかけにして、会の大先輩である成川氏から貴重な話を伺えたこと、さらに仲間たちと共有できたことが嬉しい。

たくさん山の本と出会うことを楽しみに、山と山の先輩方に学ぶ読書会を重ねていきたい。

以降の予定は、第3回(12月15日)井上靖著『氷壁』／ゲスト・尾上昇氏、第4回(1月19日)イザベラ・バード著『日本紀行』『日本奥地紀行』、第5回(2月16日)尾崎喜八著『山の絵本』、第6回(3月16日)鈴木正崇著『山岳信仰』。4月以降は未定。
(新井梓)

連載 日本山岳会とヒマラヤン・クラブのこと

② H C の組織と J A C

沖 允人

H C の本部が Mumbai にあることは先回述べたが、今回は H C の組織と J A C の関わり合いについて概要を紹介したい。なお、H C の組織の詳細については次の H C のホームページを参照されたい。
<https://www.himalayanclub.org/about-us/an-introduction/>

会長 (President) は Mr. Tanil Kilachand で、その下に副会長 (Vice President) が 3 人おり、Mr. Divyesh Muni、Mr. Motup Chewang、Dr. Kallol Das である。Mr. D. Muni は Mumbai を起点として、東部カラコルムなどで最もアクティブに登山を実施している人で、丁寧な登山報告を定期的に雑誌に発表しているのが、存じの日本人も多いと思う。Mr. M. Chewang はラダックで一番大きい登山・トレッキング会社の代表でもあり、レーにも事務所があり、お世話になった日本からの登山隊も多い。Dr. K. Das は Kolkata に在住しており、H C の Kolkata 支部の世話をしている。事務局長ともいふべき秘書

(Hon. Secretary) は女性の Ms. Nandini Purandare で、財務担当 (Hon. Treasurer) は Mr. Deepak Bhimani である。名誉会長 (President Emeritus) Dr. M. S. Gill と名誉編集長 (Editor Emeritus) Mr. Harish Kapadia がお目付役として在籍している。

Mr. H. Kapadia は 2008 年に 2 度目の来日をしたが、氏の豊富なインド・ヒマラヤの登山経験と知識を知る人は多い。また、J A C の合同登山隊のインド側隊長としてシアチェン氷河に入り、Padmanabh (7000 m) の初登頂に成功。また、Karakoram Pass (5671 m) を往復し、Col. Italia (59100 m) を越えるなど、広く周辺を探索した。

インド各地の役員 (Honorary Local Secretaries - India) は名前を挙げるに足るが、J A C 会員にも存じの方もあろうと思う。Mr. Himanshu Pandey (Almora)、Mr. Kamlesh Venugopal (Bangalore)、Mr. Dorjee Lhatoo (Darjeeling,

Himalayan Mountaineering Institute) Mr. Maninder Kohli (Delhi)、Mr. Niloy Chakroborty (Kolkata)、Mr. Motup Chewang (Leh・兼任) Mr. Mahavir Thakur (Manali, W.H.M.I., Manali)、Mr. Stephen Alter (Mussoorie)、Dr. Ragunath Godbole (Pune)、Mr. Deepak Sanan (Shimla)、Mr. Depender Panwar (Uttarakashi)、Mr. Yanden Laha (Imphal) など、インド全域をカバーしている。

外国の役員 (Honorary Local Secretaries - Abroad) は、次のような人が任命されている。Mr. Garry Weare (Australia)、Mr. Claude Gardier (France)、Mr. Mikio Kamnaga (Japan)、Mr. Bae Seung Youl (Korea)、Mr. John Nankervis (New Zealand)、Mr. Nazir Sabir (Pakistan)、Mr. Jose Paytubi (Spain)、Dr. S.A. Craven (South Africa)、Mr. Ake Nilsson (Sweden)、Mr. Eric Bernhardt (Switzerland)、Mr. Derek Buckle (U.K.)、Mr. Donald Goodman (U.S.A., W.A.)、Mr. Paddy Iyer (U.S.A., California) など。
 日本の役員の神長幹雄氏は、初代の松田雄一氏、2 代目の尾形好

雄氏に続く 3 代目で、『山岳』の編集長という要職にありながら、今後の J A C と H C の橋渡しをしていただけるものと期待している。

パキスタンの役員でシムシャール出身の Mr. N. Sabir はパキスタンの最も有名な登山家で、パキスタン山岳会役員であり異色な人事であるが、インド・パキスタンの国境地帯であるシアチェン氷河源流を国際的な平和公園にしようという願いを持っている。残念ながらまだ実現してはいないが、インド軍主催による、インドの民間人を対象としてシアチェン氷河の約 60 km を 20 日間で歩くトレッキングが実施されていたりして、希望が持てる。なお、シアチェン氷河源流のインド側は Karakoram Wildlife Sanctuary、パキスタン側は Central Karakoram National Park として 2003 年より制定されており、これを連携して transboundary Peace Park として制定しようという雄大な構想である。平和公園の構想は左記を参照されたい。
<http://www.harishkapadia.com/downloads/siachen-peace-park-proposal.pdf#search=%27Siachen+Glacier+Peace+Park%27>

追

OBITUARY

悼

徳久先生と私

土田紘介

東京教育大学大学院研究科で地理学専攻だった徳久球雄先生は、同大山岳部にも所属なさっていた。

1966年、35歳で青山学院大学への赴任と同時に山岳部部長（顧問）にも就任。現役4年生の遭難死亡事故の直後のことであり、のっけから苦勞をおかけすることになってしまった。

先生と私の縁はこれ以来だった。山岳部の3、4年生、そして19



徳久球雄（とくひさ・たまお）会員番号3768

1931年生まれ。東京教育大学で地理学を専攻、同大学院を修了後、研究科を経て1966年、青山学院大学に赴任、同時に山岳部部長に就任。

80年代からは桜美林大学大学院教授、北海学園北見大学教授などを務める。専門の人文地理学研究・教育から環境・資源調査、山岳・観光・旅行団体の役員まで、活動は多岐にわたる。日本山岳会でも理事・評議員を務めた。

68年のアラスカ遠征、また私自身の就職先の紹介、お仲人、さらに私の監督時の部員の遭難死亡事故、ヒマルチュリ遠征等々、ずいぶんお世話にあずかった。

1968年夏、先生の手岳部部長就任3年目、私たちは2年前の遭難死亡事故の後遺症を克服し、アラスカチユガチ山群の最高峰マールカスベイクー（4016m）に現役主体の遠征を計画し、未踏の南西稜からの初登攀に成功した。この遠征の隊長は、当初は部長の徳久先生だったが、ご子息の体調不良

のため、栗林一路OBに交替。準備中にアラスカ州政府事務所を訪ねたことがあったが、そのときに何人かの隊員が遅刻して先生から厳しく叱責された。日ごろの温厚な人柄の中に隠し持たれた厳格な一面を垣間見た思いだった。

その後、幼くしてご子息は亡くなり、留年2年目の私は、雑誌編集の仕事の合間にその追悼集『善かつ忠なる僕』の編纂をした。このころ先生は日野市にご自宅を新築、同じ日野市に住んでいた私の妹が請われて、先生の娘さんのピアノの出張レッスンに通ったこともあった。

先生の編著、『コンサイス日本山名辞典』（三省堂、改訂後は『事典』に）、『山を読む事典』（東京堂出版）、『新岳人講座』全9巻（東京新聞出版局）などの執筆・編集を、微力ながらお手伝いさせていたことも懐かしい。

青山学院大学では人文地理学、観光論などの教授を歴任され、一方では一般体育実技のシーズン・コースに登山を導入、その授業の夏山登山では、穂高などに何年かご一緒したこともあった。また、先生は様々な関連分野の学会でも活躍なさり、2014年までは、日

本山岳文化学会の副会長を何年か務めておられた。

ただ、ご専門以外のフィールドでも山から旅・観光まで広汎な分野へのご関心と好奇心からか、役職とは無関係に方々の活動に踏み込んでおられたフットワークの良さも手伝って、後代の現役山岳部員との交流が徐々に減っていったことが惜しまれる。外見の穏やかさと八面六臂の実務性を闊達さで包み込んだ、今は懐かしい山屋肌の師でもあった。

80年代初めには同じキリスト教系の桜美林大学に移られたが、20年ほど前から私は自分の流儀で、お仲人に対しての盆暮れの挨拶をはじめ、縁故者への年賀状なども一切止めてしまったことから、疎遠になってしまっていた。そのことが長らく気になっていたが、今年2月に先生のご自宅を訪ねた後輩の岩井胤夫君から近況の報告を受け、一度伺わねばと思っていた。しかし、それも現在は遠隔地住まいのために、なかなか実現しないでいたところへの計報だった。私自身が彼岸に移った折には、まず数々の不義理をお詫びしなければならぬと思っている。

（青山学院大学山岳部OB）

東西南北

N

S

熊本のウエストン

田上敏行

ウエストン来日後、最初の赴任地となった熊本在住時代の足跡については、資料がほとんど見当たらず現在に至るまで空白のままである。筆者は数年前から調査を続け、このたびウエストンが熊本着任後、最初の6週間住んだ住居跡を特定することができたので紹介したい。

熊本着任当時のウエストンについて、最もまとまった資料は会報「491号」に安江安宣会員が発表した「ウエストン来日第1報など」であろう。内容はウエストンが明治22年1月3日に英国聖公会本部に送った報告書で、明治21年4月1日の神戸上陸から熊本着任までの状況を述べたものである。30年前の会報で、目にする機会も少な

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

いと思うので関係部分を再録する。「10月15日大阪をたち、長崎には2、3日滞在、同地でブランドラム師と面会して連れだつて熊本へ出発することにしたが、沿岸航路の便船の出帆が悪天候のためおくれ、結局10月21日の日曜日の朝、長崎を出帆した。（中略）8時間かかって船は熊本に最も近い百貫沖に投錨した。おりから引き潮の加減で岸に近づけず（中略）約2時間かかってやつと百貫港に上陸することができた。ここから7、8マイル又あるいて熊本にたどりついたわけである。（中略）熊本について最初の6週間ほどは宿舎がみつからず、ブランドラム師と彼の姉がすんでいた住宅にやつかいになった。」

本聖三一教会）で布教活動に当たっていた。ブランドラムの当時の住所については、熊本聖三一教会に問合せみたが、不明とのことであった。

ところが、そのころ偶然読んだジュリア・ボイド著『ハンナ・リデル』に、ブランドラムがハンナに住居の世話をしたときの興味深い以下の記事を見出した。「ブランドラム一家は熊本市の中心部、熊本城から歩いて数分のところに住んでいた。ハンナとグレイスのために、長安寺町という隣の通りに日本家屋が用意されていた。」

長安寺町は、熊本市の中心部を南北に走る上通りから東に延びる通りの名である。隣の通りが長安寺町だから、ブランドラムの住居は長安寺町のひとつ北の桜井町か、ひとつ南の手取本町ということになる。この時点では、藩政時代に武家屋敷が多かった桜井町が有利と思われたが、特定には至らなかった。

「写真来客名簿」だった。

そして名簿を見ているうち、もしかしたらウエストンが客として訪れ、名簿に記載されているのではないかと直感した。さっそく富重写真館に問合せたところ、名簿の劣化がひどく、すべて県立美術館に保管されているとのことであった。

そこで県立美術館に連絡し事情を説明したところ、活字に復元した名簿のコピーをもらえた。残念ながら、いちばん古い名簿は明治22年10月以降のもので、ウエストンが大阪へ転出した後のものだった。

念のため残りの部分を調べたら、明治23年1月14日に、ブランドラムが2人の子どもと訪れた記録があり、住所が記載されていた。住所は熊本市桜井町式番地となっており、ウエストンがやつかいになったブランドラムの住居跡が特定できた。市役所に問い合わせたところ、現在の住居表示は、上通町7-35になっていることが分かり、さっそく現地に行ってみた。上通りアーケード街から桜井通りを東に少し入った所にある和教奇司館というホテルが住居跡だった。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

緑爽会

月例会—穴田雪江さんの 「武田久吉と歩いた尾瀬」

緑爽会は10月7日夜、女性登山家の草分けで、戦後の10年近く尾瀬の長蔵小屋で働いていて、武田久吉と交流があった穴田雪江さんを日本山岳会のルームに迎え、尾瀬で見た武田久吉について語っていただいた。穴田さんは1960年、ヒマラヤのデオ・ティバ（6001m）に初の女性6人の遠征隊員として登頂に成功、日本山岳会の女性懇談会理事などを務め、女性の登山、特に海外登山を支援した。穴田さんから、武田久吉から穴田さんに宛てた交流を示す葉書・手紙や写真のコピー数枚が資料として配付された。昭和36〜37年の消印のある葉書や手紙には、武田久吉が鳥海山に調査に行く予定や、行ってきた後の報告などが細かく

書いてあり、自分の娘よりもはるかに若い、50歳も年下の女性に對しても丁寧な言葉遣いで對等に語りかけているところに、武田久吉の人の柄が見える。音楽の話をして

いるものもある。

穴田さんは、昭和28（1953）年、20歳のときから10年ほど、尾瀬沼畔の長蔵小屋と尾瀬ヶ原の第二長蔵小屋で春から秋まで働いた。ヒマラヤに行く資金を貯めるためだった。「武田先生は毎年、何回もいらつしやいました。花のことをいろいろ教えてくださった」。当時の尾瀬は、夏休みは人の出入りが多くあつたけれども、春と秋は土日が込むだけで、ほかの日は本当に静かで、武田先生はそういうときに来ておられて、お供をさせてもらった。只見川の最上流まで行ったときは、倒木をまたいで行くのに、武田先生は私の手を取って、どんどん引つ張っていくけ

れど、私は手を引つ張られて、必死になって先生の後を付いていきました」と当時を振り返った。穴田さんが初めて出会ったとき、武田久吉は70歳。

この日の月例会には、緑爽会員で長蔵小屋の平野紀子さんも、春の雪解けから秋が終わるまで植物の調査に尾瀬を歩き回る、81歳の武田久吉の姿を撮った貴重な16mm映画「私と尾瀬」（ビデオに変換したもの）を持つてきて、武田久吉の思い出を語つてくださった。平野長蔵の息子長英（紀子さんの義父）が企画、昭和39（1964）年に1年かけて撮影された。武田久吉本人のナレーションが入っている。

紀子さんはこの年、長靖氏と結婚して尾瀬に入ったが、その年に武田久吉に出会った。武田はその後昭和43年、85歳まで尾瀬に入っていたという。「大江湿原とか、一緒によく歩きました。先生はごみをステッキで刺して拾つてた。昼に食べ残したおにぎりがあると、夜の食事のときは、おにぎりを先に食べていた。ふつうの日本人より日本的だったと思います」と語った。当時の長蔵小屋の宿帳を見ながらのおふたりの話に、尾瀬を世に知らしめ、尾瀬の自然を守るのに尽くした植物学者・登山家を想った例会であつた。

（石塚嘉一）

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

静岡支部

「山の日」記念ハイキング 「大日古道」に参加して、

今年から新しく制定された国民

の休日「山の日」の記念行事として、県内の山岳4団体（静岡県山岳連盟、静岡県勤労者山岳連盟、静岡市山岳連盟、日本山岳会静岡支部）が協力し、県民に呼びかけて10月

16日に東部(富士山麓)、中部(大日古道)、西部(湖西連峰)の3ヶ所で記念ハイキングを実施した。そのなかで、60名が参加した大日古道ハイキングを報告する。

大日古道は昭和44年、静岡市と合併した旧安倍郡井川村の村中から大井川を渡って安倍川との分水嶺にある大日峠(1160m)を越え、同村の口坂本まで、約8kmの山路の名称である。昭和32年に完成した井川ダムに続き、井川林道が開通するまで村の生活路や通学路であるとともに、古くから村の中心から静岡市内へ通ずる重要な往還であった。

南アルプスの3000m以上の山々のうち、赤石岳を含む10座を擁する旧井川村の歴史は古く、縄文時代中期まで遡ると言われる。

寄付金及び助成金などの受入報告

平成28年10月報告まで

寄付者など	金額 (単位千円)	寄付の目的、その他
井藤恵美子 様	30	110周年記念学術調査隊へ
西田 進 会員	10	110周年記念学術調査隊へ
吉川正幸 理事	50	110周年記念学術調査隊へ
山田和人 理事	50	法人運営費用として
村井龍一 会員	10	永年会員からのご寄付
日向祥剛 会員	250	北九州支部ルーム運営費
八幡 浩 会員	50	広島支部学生部 / YouthClub へ
津田 寛 会員	10	広島支部ルーム運営費

有史後では中央とのつながりを示す、田代の薬師堂の駿河国「服織庄」の文字や、後醍醐天皇第四皇子の宗良親王が詠んだ「おほい川ちらぬ梢のかげなれば ながれもやらぬ せぜのもみじば」が遺されている。また各所で金が産出され、なかでも笹山金山は室町時代から江戸期の慶長年間まで続いた。さらに村内2万8000町歩に及ぶ森林からは、豊富な木材を産出する。江戸時代、家康は駿府城本丸の御用木として2万5000本を伐り出させた。そして明治28年に大倉喜八郎が山林2600町歩を買い取って以来、昭和に至るまでパルプの材料などとして盛んに伐採が行なわれた。伐採された木は「鉄砲」と称する丸太を組み立てたダムに集め、一気に開いて「鉄砲水」で大井川へ流して搬出した。

「鉄砲跡は、昭和30年代まで何ヶ所か見ることができた。

外国人旅行者として初めて井川を訪れたのは、明治14年のイギリス日本公使館員のアーネスト・サトウ。また、登山家としては明治44年、中村清太郎の記録が初期の「山岳」に掲載されている。昭和の初めには、冠松次郎など著名な岳

人が大日峠越えで入村し、南アルプスの山々を訪ねた。

地元の静岡では昭和30年の春、県スポーツ祭山岳部門として大日峠越えを行なった。そのときに筆者も参加、リーダーは第3代支部長の山本朋三郎氏であった。その後、昭和32年の国体登山部門、昭和39年の国立公園になった記念登山大会の折にもこの峠路を歩いたが、今回の「山の日」記念ハイキングまで長い空白期間があり、大日峠越えを楽しむにしていた。

今回、懐かしい峠越えに期待を込めて参加したが、口坂本からの登り道は、ほとんどが大きくなったスギ、ヒノキの薄暗い林の中で、最近人が歩いた形跡はなく、登路もはつきりしない所が多くなって往時の面影はなかった。

当時一丁ごとに33体置かれたと伝えられていた観音像が何体か残っていたが、それらは一つもなく、番号札だけが寂しげに立てられていた。しかし、路脇の大きなスギの木と、その下から湧き出る泉は変わらずあり、泉に隣接してあった茶屋は石垣と土台だけが昔のなごりを留めていた。峠の片隅には、江戸期のお茶倉が再建され、往時

を偲ぶことができた。

好天に恵まれた峠の広場では、赤石岳や悪沢岳など、地下をリニア新幹線のトンネルが通る予定の南アルプスの山々を眺めて語り合った。峠からダムまでの道には33体の観音像に代わって、井川の人たちによる新しい石造りの観音像が奉納者名入りで置かれていた。

ダムの渡し船は10分もかからないほどだが、湖面に広がった景色と湖面を流れる柔らかな風が、小春日和に訪れた私たちに憩いのひとときを与えてくれた。船を降りてから、観音堂参拝班と井川発電所見学班に分かれて(予め参加者を分けた)行動した。私が参加した観音堂は十一面千手観音ほか4体が奉られている。この秘仏を守る田畑さんは拝観した私たちのために、味噌だれを付けた田菓をたくさん作り、全員に振舞ってくれた。このように、「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する日」という「山の日」の趣旨を胸に、水没前の旧井川村に思いを馳せ、再び文化の香り高いユネスコ・エコパークの町として発展する井川の姿を想い浮かべ、「大日古道」ハイキングの1日を納めた。(白鳥勝治)

Climbing&Medicine・75

登山者のハチ刺され遭難

野口いづみ

今年の8月、日本山岳会東京多摩支部の会員が奥秩父の豆焼沢（雁坂嶺の東）でクロスズメバチ（通称地蜂）に刺され、アナフィラキシー・ショックで死亡される事故があった。ハチ毒による死亡事故は本邦で年間約20例あり、クマ、ヘビなどよりも多い。ハチは人にとって最も危険な生き物と言えるが、なぜか報道の対象にされる機会が少ない。作業中の事故が多いせいかもしれない。クロスズメバチはキロスズメバチよりおとなしく、ハチ毒の毒性も低いと言われる。しかし、問題は、枯葉の堆積したような地面に巣を作るので、誤って巣を踏んでしまっただけで襲われることがあるということだ。今回の事故もそうだった。

ハチでは、刺された者は体内にハチ毒に対する抗体ができ、その結果2度目にハチ毒に曝露されると重篤なアレルギー反応であるアナフィラキシー・ショックを起こすとされる。アナフィラキシー・ショックでは血圧低下、頻脈、意識消失、顔面蒼白、じんましん様発疹などを生じてショック状態となり、重症例では10～15分程度で心肺停止をきたす。

豆焼沢の遭難者については、1年前に奥多摩で多数のハチに襲われて、1週間ほど寝込むほどの全身症状を示したとのことである。ハチ毒によるアナフィラキシー・ショックを起こすリスク因子として、高齢、前回のハチ刺されから1年以内、前回のハチ刺されでなんらかの全身反応もあったことの3点が挙げられている。遭難者は80歳であり、3つの因子がすべて当てはまる。

筆者がハチによって重篤な症状を起こした登山者3例について調べたところ、3例とも多数のスズメバチに刺されていた。このうちハチに刺された既往があった者

過去のコラムは次の手順でご覧になれます。

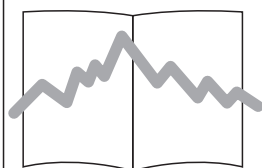
日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>



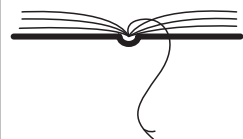
エピペンは大腿外側に注射する

は今回の豆焼沢の1例のみで、2例は既往がなかった。それに対して、1～3ヶ所だけしかハチに刺されなかった者はいずれも局所症状を示しただけで、重篤な全身症状を起こした者はいなかった。また、9月に飛騨市でマラソンランナー115名がスズメバチに刺される事件があったが、軽症例のみで重症例はなく、3分の2以上のランナーがレースを続けたという。おそらく、多数の部位を刺された者はいなかったためと思われる。これらの例は、ショック症状を起こす場合は、大量のハチ毒によってアナフィラキシー・ショックに類似した反応（アナフィラキシー様ショック）を起こす場合が少なくないことを示している。つまり、ハチに刺された既往がなくても、多数のハチに刺されると、だれでもショック症状を起こす危険がある可能性がある。

アナフィラキシー・ショック（アナフィラキシー様ショックを含む）に対してアドレナリン（エピネフリン）が奏効し、一般の方向けにエピペンというアドレナリン自己注射液がある。エピペンはハチ毒の抗体検査で結果が陽性の者は保険で入手できる。しかし、たとえ陰性であっても、沢など、あまり歩かれていないコースを歩く場合はハチに遭遇する危険があるので、エピペンの携行を検討すべきと思われる。携行の有無が生死を分ける場合もあるだろう。エピペンについては会報724号の医療委員会コラムに詳しく記したので、参考にされたい。



図書紹介



ジョン・ハント著／吉田薫訳 エベレスト初登頂(新訳)



2016年8月
エイアンドエフ
195×135^{mm} 363^頁
2700円＋税

英国隊のエベレスト登頂が伝えられたのは、私の大学1年生の春、今から63年前のことであった。

比類なく冷静で、感動に満ちた記録を書き記したジョン・ハントの『エベレスト登頂』記は、世界の名著として何度も再版を重ね、今日に至っている。

この書の日本語版は、登頂の翌年、1954年4月に先輩の田辺主計、望月達夫共訳に松方三郎、島田巽両氏による全文校訂の協力を経て、朝日新聞社より出版されたまま絶版となっている。本日、紹介する本書は、5度目の再版原書

2013年度版を(株)エイアンドエフ社、吉田薫氏の翻訳により出版されたものである。

訳文全体の流れを見る限り、本文に大幅な加筆訂正等は見受けられないが、訳し方と表現でこれほど言い表し方が違うものかと思え

るほど当初の邦訳との間に差が生じている。これは翻訳の抱える運命とも言えるものだと思う。今回は平穩な訳で読みやすく、適切な表現が随所に見受けられる立派な一冊である。

1954年の日本版は、時間的な制約があったためか、資料7編のうち遠征日誌と用語解説のみで、ほかの重要な資料5編は割愛されたまま出版され、後で特装本として全資料が添付され発刊されているが、今回の翻訳本にはこのすべての資料が掲載されている。このなかでも特に資料4・酸素の項では参考となる点が多かった。1970年の日本エベレスト登山隊の酸素を担当した私にとって、英国隊の酸素装置が軍関係の組織の協力を得て進められていることが限りなく羨ましかった。英国隊が酸素装置の故障により登頂を諦めた事例もあり、日本隊がマナスルの開放式装置に特化して開発を進めたのも、この資料が一助となっている。

また、資料6・生理学と医学の項では今でも参考となることが多く、英国隊の長年にわたるエベレストの経験が高所医学の基本とな

り、大きく貢献してきた。これは、1921年から30年にわたる高所登山の経験の積み重ねにより、勝ち得た生理学の一分野である。

今回の本書全体の構成として気付く点は、1975年のエベレスト南西壁隊長のクリス・ボニンが序文を認めていることと、あとがきに「1993年版によせて」とする著者ジョン・ハントの一文が掲載されている。この内容は、示唆に富んだものであり、ハント氏の、山や社会経験で得た自らの理念や信条を通して若者に語りかける熱い思いを読み取ることができ、蓋し名文であり、参考となるう。

このほか、2001年版のあとがきにエドモンド・ヒラリーの一文も紹介されており、頂上を踏んだ男の驚きと時間とともに達観していく彼の姿を知ることができ、興味深い。

さらに2005・2011年にマウント・エベレスト基金の会長を務めたヘンリー・ディ大佐のあとがきで「長年にわたりその資本を守り強化することに努めてきたイギリス登山界にとってエベレスト基金の価値は計り知れないものがあり……」と記し、世界の登山・

探検行為をはじめ学術調査など、新たな人の行動の支援を見据えた幅広い視野で基金のあり方を見つめている。この基金に触発され、私たち日本のエベレスト登山隊以降実施してきた積立基金はどこに姿を消したのか。それほど英国の基金は、重要な役割を果たしていることを改めて知らされた。

これらの資料から読み取れるすべての考えの底流にある思いは、若い人に対する期待である。若者がこの書を読み、自らのエベレストを求め行動を起こすことに限りない期待を寄せ、ぜひ一読されたい。

（平林克敏）

米山 悟著 冒険登山のすすめ——最低限の装備で自然を楽しむ



2016年10月
筑摩書房
新書判 208頁
820円＋税

「冒険登山」と聞くと、道なき山に入り、生死を懸けて苛酷なサバイバルをする登山……そんなイメージを持たれる人がいるかもしれな

い。しかし本書はそういった、現代の固定観念的「冒険登山」のハウツー本ではない。

著者は長野県松本生まれのNHKカメラマン。子どものころから山に親しみ、探検登山が盛んな北海道大学山岳部での経験を通し、便利な装備を山に持ち込まず、現場の材料でやりくりする「天然山行」を多く重ねてきた山男だ。夏は焚き火を楽しみ、冬はテントではなくイグルー(圧雪ブロックを組んで作るシェルター)で夜を越す。道具はなるべくシンプルなものを使い、自らの経験と知恵を大切にしながら登山を実践している。

本書は、初めに自らの山との出会いについて語られた後、初心者向けに登山計画の立て方や山での危険についての基本的な知識が紹介されており、これから山登りを始めようという人にも読みやすい導入になっている。しかし、いつの間にか、内容が冬山や道のない山、長距離スキー山行の魅力へと変化してゆくのだが、本書が「登山はもともと冒険のはず」という考えのもとで執筆されているせいか、読者は気負わずに自然とその世界へ入っていける。

自分の頭と体でピンチを切り抜けることで「本当の自由の感覚」を体験する——それが「冒険登山」であるとして、その心構えと著者自身の体験談が分かりやすく紹介されており、読んでいると今すぐ山へ行きたくなり、うずうずしてくる。

しかし「便利な道具に頼らない」という表現に関しては疑問が残った。「道具はそもそも便利なもの」だからだ。つまり、自分が登山で得たいものは何なのか、そのために必要な道具はどの程度のものなのかを、よく考えろということだと私は思う。

著者は本書を「17歳ぐらいの青年」に最も読んでほしいと願っているが、登山を始めて数年が経ち、少し慣れてきたところで、自分の登山のあり方にうつすらと疑問を感じ始めている大人たちにもぜひ読んでほしい。きっと、自分が山へ行く理由を改めて考えるだろうし、青年に戻った気持ちで「自由」について思考を巡らせることができるはずだ。

(伊藤美沙)

会務報告

平成28年度第7回(11月度)理事会

議事録

日時 平成28年11月9日(水)19時00分～20時05分

場所 集会室

【出席者】小林会長、大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・直江・星・谷内各理事(所用のため中山理事は業務執行報告2まで欠席)

【欠席者】吉川副会長、山賀理事、平井・重廣各監事

【オブザーバー】節田会報編集人

【協議事項】

1・名誉会員の推薦状況について
平成28年度新名誉会員の推薦について協議した。(小林)

2・平成28年度支部長会議の開催について

12月3日(土)に開催される平成28

年度支部長会議について協議した。

(佐藤)

【報告事項】

1・10月受付分の入会希望者11名、準会員入会希望者5名について承認したとの報告があった。(小林)

2・寄付金8件について報告があった。(佐藤)

3・平成28年度年次晩餐会の準備状況について報告があった。(佐藤)

4・平成28年度新永年会員34名について報告があった。(佐藤)

5・上高地山岳研究所の閉所作業が完了したとの報告があった。(大槻)

6・以下の規程類の整備検討状況について報告があった。(佐藤・小林)

・職員関係規程類
・会章、会員章に関する規程
・上高地山岳研究所管理規定

・運営要領

- ・委員会規程別表の見直し
- 7・11月7日(月)に開催された平成28年度第2回評議員懇談会における意見等の報告があった。(佐藤)
- 8・日本山岳会の会員動向と財務状況について報告があった。(佐藤)
- 9・船村徹会員の文化勲章受章について報告があった。(大久保)
- 10・「田部井淳子さんを送る会」の開催について報告があった。(佐藤)
- 11・「山」11月号の発行予定について報告があった。(節田)

【連絡事項】

- 1・栃木支部創立十周年記念式典 11月27日(日) 宇都宮市
- 2・日本勤労者山岳連盟望年会 12月2日(金)19時～ 日本勤労者山岳連盟事務所
- 3・日本ヒマラヤ協会2016年華甲望年会 12月10日(土)18時～ プラザエフ
- 4・OUTDOOR FES 平成29年3月4日(土)～5日(日) 大阪万博記念公園
- 5・平成29年度広島支部総会 平成29年4月8日(土) 広島市

【今後の予定】

- 1・支部長会議 12月3日(土)10時30分～ 京王プラザホテル
- 2・年次晩餐会 12月3日(土)13時30分(受付開始) 京王プラザホテル
- 3・次期理事会等 12月度常務理事会 12月6日(火)18時30分～ 集会室 12月度理事会 12月14日(水)19時～ 集会室

ルーム誌 11月

- 1日 YOUTH CLUB スケッチクラブ
- 2日 図書委員会 山行委員会 青年部
- 4日 YOUTH CLUB 高尾の森づくりの会
- 7日 評議員会 総務委員会 スケッチクラブ
- 8日 山岳研究所運営委員会 再生委員会
- 9日 理事会 休山会 山想倶楽部
- 10日 フォトクラブ 山岳地理クラブ 九五会
- 11日 総務委員会 緑爽会
- 14日 総務委員会 スキークラブ
- 15日 国際委員会

- 16日 青年部 三水会 つくも会
- 17日 科学委員会 麗山会 みちのり山の会 フォトクラブ
- 18日 山行委員会 スケッチクラブ
- 19日 山の自然学研究会
- 21日 総務委員会 資料映像委員会 YOUTH CLUB
- 22日 デジタルメディア委員会 遭難対策委員会 スキークラブ
- 24日 総務委員会 公益法人運営委員会 学生部 山遊会
- 25日 自然保護委員会
- 28日 総務委員会 YOUTH CLUB
- 29日 総務委員会
- 30日 総務委員会 自然保護委員

会 図書委員会 00名

11月来室者 513名

会員異動

物故

- 徳久球雄(3768) 16・11・1
- 町田武雄(6800) 16・6
- 小澤恒男(6961) 16・11・11
- 山寺仁太郎(7717) 16・10・28
- 海野賢一(10021) 16・9・12
- 浅川浩子(10556) 16・9・6
- 渡邊英紀(13963) 16・11・21
- 渡辺勝俊(14235) 16・11・21

退会

なし

INFORMATION

山行委員会

リフト横のペンションでワイングラスを傾けましょう。

日程 2月12日(日)～13日(月)

集合 12日 山形新幹線かみのやま温泉駅11時(時間厳守) 11時

◆蔵王の樹氷原 スノートレック

スノーモンスターで有名な蔵王の樹氷原をスノーシューやワカンで歩きます。ライトアップされた

10分発のバス乗車

解散 13日 かみのやま温泉駅17

時頃

行程 12日 坊平高原周辺

13日 御田神、お釜方面

費用 1万8000円(2食付宿

泊費、懇親会費、2日目昼食、傷

害保険料、雑費)

申込み 1月20日までに住所、氏

名、生年月日、電話等明記のこ

と。植木淑美宛

FAX 042-734-1498

✉ sanho@jac.or.jp

*詳細はHPに掲載、郵送希望者

には詳細をお送りします。

スノーシューはレンタルが可能

希望者は靴サイズを明記のこと。

◆講演会のご案内

医療委員会

「講演会・登山者に役立つ膝の痛

み・トラブルの予防と対処法」を

主催します。講師の小林哲士氏(聖

マリアンナ医大整形外科・膝専門

外来)は、とても分かりやすい話を

されます。

日時 2月16日(木)18時50分～20時

50分

場所 東京体育館第1会議室(J

R千駄ヶ谷駅前(徒歩2分)

会費 無料

定員 100名

申込み・問合わせ メールまたは

ファックスで

✉ yamairyou@yahoo.co.jp

ファックス042-463-28

71 野口いづみ宛

氏名、連絡先(住所・電話番号)、

会員番号を記してお申込みくださ

いますので、お誘いください。

締め切り 2月10日

*詳細は日本山岳会医療委員会H

Pをご覧ください。(http://www.

jac.or.jp/info/inkai/iryou/list.

html)

◆第26回「山好きの山の絵展」

アルパインスケッチクラブ

この絵展は毎年2月に開催して

おり、今年は26回目。60人の会員

が実際に登り、見た山々を描いた

作品約70点とスケッチブックを展

示します。

会期 2月19日(日)～25日(土)10～19

時(初日は12時から。最終日は

17時まで)

会場 JR有楽町駅前 東京交通

会館2Fギャラリー 千代田区

有楽町2-10-1

TEL 03-3215-7962

入場無料

*杉田博会員の「杉田博幸寿記念

山の絵展」を同会館地下1階エメ

ラルドルームにて同時開催

◆年始晩餐会・高橋清輝氏講演会

東京多摩支部

高橋さんは立川女子高等学校で

山岳部顧問を5年間務め、同校の

生徒を日本の高校生として初の海

外遠征と世界初のヒマラヤ遠征に

導き、さらにカナダ・ツインズ峰

登頂、ヒマラヤ・チュル南東峰

第2登、アラスカ・サンフォード

峰挑戦、中国・コングールIV峰初

登頂、ヒマラヤ・ダンプスピーク

などに登頂。数々の山行を振り返

りながら「山は素晴らしき教室」を

語ります。

日時 1月28日(土)午後3時30分～

5時30分

会場 京王プラザホテル八王子4

階(宴A)

会費 500円(会場費等)

申込み 1月20日までに坂本正智

へ。

✉ big-matti@khh.biglobe.ne.jp

TEL 090-1839-8424

◆編集後記◆

●巻頭の高橋重之会員の晩餐会レ

ポートにもあるように、今年も2

33人もの新入会員がありました。

うち37人が出席されましたが、若

い女性たちが目立ち、華やかな雰

囲気でした。代表して大島わかな

会員が挨拶されましたが、お若い

のにしっかりと内容で、すばら

しいスピーチでした。

●5年連続200人超の新入会員

が山仲間として加わってくれてい

ますが、それらの方々にJACの

クラブライフの楽しみ方を伝授す

るのが古参会員の務めかと思いま

す。そんな趣旨から「山の読書会」

の報告を掲載しました。タレント

ぞろいのJACです。断絶

のないよう、しっかりと登山文化

を次代の若者たちに継承していき

(節田重彰)

日本山岳会会報 山 859号

2016年(平成28年)12月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 小林政志
 編集人 節田重彰
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社